

とねりこの樹

# とねりこの樹

東イングラントをずっと旅行した人は、誰

でも、ちいさな田舎風の家——どこやら湿っ

ぽい建物で、普通イタリイ風の、ちが八十五

ーカーのら百エーカーもあるという耕野に

とりまかれた田舎を、知ってつるはずだ。筆

看れば、これがいつも非常な強日く目につく。のだ。

強なけたけだかい榎の樹、サウのまいたつた泥、

灰色の

土佐の森林の線

そこで、  
著者は、  
柱廊玄關が好まであ  
ホーテイコ

る。——十八世紀末の、ギリシヤ趣味を漂

わした漆喰細工の、アン女王（一七〇二年より一七三〇年向在位）「大イギリス女王」

頃の赤煉瓦の家（やめた）にくつついて、瓦より柱廊

玄關が好まである。ホールは、内装は屋根に

のぼれるようにあつていて、どのホールも常

に美術品とちりさをオルカンが備えつけてあ

らよくなホールだ。また著者は、図書室が好

まである。十三世紀時代の詩の面から、シエーク

スピアの四折判本<sup>ラポート</sup>までいっているよるを圖書

室である。無論<sup>ハ</sup>筆者は空想が好きである。その

めんびく、こころ<sup>ハ</sup>館<sup>ハ</sup>建<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>られ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>当<sup>ハ</sup>初<sup>ハ</sup>の、

その中の生活を空想し、  
~~東洋文壇の発展の歴史~~<sup>ま</sup>

~~東洋文壇の発展~~ 今とはおつとちがつて、たとい

金は多くもたよくても、趣味ももつとまじり、

生活もまつたく面白かつた頃の、地を華や

かたりし春平の世の生活を空想する<sup>ハ</sup>ことが好

まである。筆者は、こころ<sup>ハ</sup>館<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>持<sup>ハ</sup>ち

たいと思ふ。そしてその館にそぐあしいだけ

の金をもち、さういふつましく友達をもて  
 楽しん<sup>ん</sup>と思ふ。

だが、まあこれは、本題をはなれた話であ  
 る。筆者は、こゝに描叙したよ<sup>う</sup>な館<sup>せふ</sup>に走  
 た、ふしむ<sup>り</sup>な事件の數々を語りた。

それは、サツフォークのキャスリンが、ホ  
 ールで起つたことである。筆者はこの話のあ  
 つた時代以来、この建物について行かれたい  
 ろいろの~~事~~<sup>こと</sup>を考へるが、筆者が描叙した主

要の特徴は、まづそのままな<sup>り</sup>である。——す

ちまた、イタリヤ式の植廊<sup>ポーチ</sup>を、外部より

内部が支配する、白壁の館の四角を一廊、

<sup>森の静寂</sup> 樹々の影をまわす 花園や、沼——

けの家のままとは、ぐつとちがつてい

るこの館<sup>パルク</sup>の一つの特徴は、も<sup>く</sup>な<sup>く</sup>な<sup>つ</sup>て

いた。讀者がそれを花園から<sup>目さ向</sup>見るなら、

右手にすはらしく大なる葉を、●と作りこの樹<sup>老</sup>

を<sup>め</sup>認<sup>め</sup>る<sup>た</sup>。庭のついでに五六ヤードそ

ばに<sup>建物は</sup>枝を

<sup>静け</sup>るの静けぬぬろげり。筆者はこの





判が響えられまへは、おいふ人書を年月

を要したのだった。この魔女への疑いを告

した人々、<sup>か</sup>實際魔女たちが、<sup>あ</sup>種々の異常

な力をもつていたと<sup>(思った)</sup>想像するの  
か、<sup>あ</sup>いは<sup>力</sup>魔

でなくとも、すくなくも、魔女たちの人々

禍害を<sup>あ</sup>加える意志をもつていたと思つたのか、

あゝいは、<sup>あ</sup>多量の魔女たちの<sup>あ</sup>魔が、<sup>あ</sup>魔女發

見者の<sup>あ</sup>筆を<sup>あ</sup>ひたすら<sup>あ</sup>筆<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>線<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>拷問<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>

無理やりに白状させられたのか——それ等のこ

とは、筆者の想像では、<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>解<sup>あ</sup>け<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>疑<sup>あ</sup>問





「ホールは、領主さま  
は大地主の住宅。」

農夫は、婢女を救おうと骨折った。彼等は夫  
人の性根を懸念の詔言し、陪審官の評決は  
は非常の期待をのけた。

だが、この夫人に致命的だったのは、マシユ

ウ・フェル卿とマシユ、キヤスリンガム・ホールの持

主の詔言だった。マシユ卿は、家の中心から、

三度までも夫人の行爲を見たと詔言した。満

月の晩で、夫人は、日あたしの家のそばの、

と仰りこの樹から葉を枝を集めたといふので

ある。夫人は肌衣一枚で枝によじり、異



しぐらに直つた。だがドアをたたいても  
 十五分ばかり待たされた。夫人はひどくフリ  
 フリして、いまベッドから出たよと、眠む  
 げな顔をしきり出て来た。御はなじつた  
 が、おれも答へたいが答は得られな  
 かった。

これがおれな証拠となつて、~~裁判官~~ 教区の

ほめの人達おれも、~~おれ~~ <sup>おれ</sup> 注目すべき、非常

な~~おれ~~ 同情があつたらしいが、マザ

ーソール夫は有罪と有り、死刑を宣告さ

れた。裁判の一周の後、夫人は、~~おれ~~ <sup>おれ</sup> 五六人以上

州執行官代理だった

刑一子リケ

の、同様に不祥な仲間といつてよい、バリイ・セント・エドマンズで、絞首刑に處せられた。

マシユウ・フェル物は、その死刑執行に立ち争つた。陰謀を、目まいのしそくを三月の朝、

馬車を繋ぎ止めて後着させたのも、ノースゲート

の外側の、絞首臺が設けられた雑草の生つ

た丘へ、馬車を駆った。ほらの囚人達は、悲

しいのあまりぼんやりして、山崩れくずかてつた。だ

がマガースール夫人だけは、  
手紙の宛先  
死んだ面々も

死んだ面々も、生前のごとく、いつの日も

様な性質をあらわしていった。著書当時の記録

係はこゝしるしといる。

曰彼女の毒々しき感情は、立令人見物人

はかろか、實に刑執行人にすら、恐ろしさを

感ぜしめたり。彼女を目撃せる者のみならず、彼

女の荒ふる悪魔の生きなみの形相おもしろいを示し

たる事と、~~確~~<sup>新</sup>言を止まがりに。著書は彼女

は、<sup>並みい</sup>法官に對しては、おんらの反抗議も口に

することきりきりきりしと雖も、彼女を絞首臺に

上に引き行く者を見あげたるその形相の凄ま



じきと毒々しき●は——後れ徳寺の一人がわ

れに確まするところれよれば——實に、半歳

<sup>をば</sup>をば ~~あ~~らしまお、~~あ~~をを思ひだに深く心ん慄

然たよりのまおぼえしる <sup>ほど</sup> ~~あ~~なりき。

ところで、この記録には、<sup>夫人</sup> ~~あ~~の死にあ

たつて、かの~~あ~~人たか ~~あ~~あけの物からな

い言毒よといつたところであつた。それは、曰い

まりキトスリンガム・ホールには、おん~~あ~~あか

あゝだろよよとといつた言毒で、夫人は低く、

二度は<sup>と、ふれま</sup> ~~あ~~口の申で ~~あ~~えええのたつた。

原典 資料

マシエウ・フェル卿は、さういふ夫人の態度

に、平然としていふわけはなかつた。卿は

陪審官の任務を終ると、教区のお師といつ

しよりの帰館してゐるのであるが、そのお師も

の事件を語り合つた。裁判はあつて、卿の

言は、<sup>上</sup>女で提出したものでなく、

まゝ<sup>49P</sup>は、<sup>特に</sup>魔女見破りの狂言に因つて

いる者ではなかつた。だが、卿は、向後

これらの事件は、これ以上語るべきものはな

いし、自分の無罪を主張した事實については、決

誤つてはイヤといふと明言した。更には御は言葉を

つかけて、この虚刑全般は、自分の本心は

は懐いていふものである、自分は周囲の人々

の幸福を願ふ人向きののである、たゞ、<sup>は</sup>陸軍省

<sup>の</sup>事務を<sup>も</sup>願ふ<sup>人</sup>向きの<sup>人</sup>である、<sup>た</sup>だ、<sup>は</sup>陸軍省

の心とまつた。これはいかにも御の真情であ

るよといふみえた。で、お師も、<sup>は</sup>陸軍省<sup>の</sup>心と

道理ある人の当然の<sup>は</sup>行爲として、<sup>は</sup>陸軍省<sup>の</sup>表

しんのだつた。

数週日後、五月の、月々まごめちかす宵、

牧師と卿は、<sup>マシユウ・フェル</sup>まじらで令つた。いっしょに

ホールへあるいそ行つた。フェル夫人は、そ

の母<sup>堂</sup>が養育童態だったので、<sup>まじら</sup>家へ行つて

いて、<sup>マシユウ</sup>卿は家へ一人いるのだった。で、

牧師のクローム氏は、まじら後ホールで夜食

をたべるより、しきりに勧められた。

<sup>マシユウ</sup>卿は、その晩は、大いそいい機嫌で

はなかつた。話はまじらと家談や教区のこと

に走つたが、それをよけ機嫌に、卿は、自分

の財産に因り、まじらより意見するまじらと述べ

る覺書を仕成した。この覺書は、後になつて

非常に大事なものとなつた。

クローム氏が辞去したのは、<sup>しよーとネエんの</sup> 午後九時半頃

で、<sup>マシユウ</sup> 細と仲は、<sup>イロハ</sup> 館の裏手の砂利道で、<sup>を敷いた遊歩道</sup>

<sup>ちよつと</sup> 向きを変えた。その時、クローム氏

をドキンとさせ、<sup>唯一の</sup> 事件は、こうだつた。——二

人は、<sup>さきん</sup> 筆者が、建物の窓のそばに坐して

いと書いた、<sup>こ</sup> あのとゆりの樹を見やつたの

ため、<sup>マシユウ</sup> 御は云々とまつて言つた。

<sup>かや</sup> 口とやり、<sup>おんか</sup> この樹幹を、<sup>おんか</sup> 葉のぼつたり





上の足を叩いていたと、彼は断言し得たのだ  
つた。

しかしこの瞬間的な舞幻影と云つていい

レウは、それきりで止んだ。二人はそこで別

れた。それ以来二人は会ったのは、二十一年回

も経つたといふよりまことではなかつた。

の三日、マシユウ、フェル卿は、いつものお茶

のよう、朝方には二階から下りては来るか

つた。いや、七時に来つても八時に来つても、

下りて来なかつた。そこで徒徒しんじたちは、卿の

寢室へ行ってドアをノックした。筆着役徒  
 僕たちだが、不安なく身をすまし、幾度も  
 鏡板をおちつかける掃箒を、ちかちかと書く  
 には及ばない。とくとくドアは外側から開け  
 られ、ぬ、室内で発見されたものは、黒か  
 んで死んで、美<sup>い</sup>の姿であった。読者様が  
 きう想像さふるような、暴力のこころしは、そ  
 の時は一つも見つけられなかった。だが窓  
 は開けおたれりた。

徒の一人は、牧師を呼<sup>よ</sup>びにゆ<sup>く</sup>

それから牧師の描図で、横展官に知らせ

るため馬を飛ばした。牧師のクローム氏は、

大急ぎでホールへ駆けつけた。そして屍體の

ある室を見つけた。氏はマニユウ卿に對する

侮辱と哀悼を示す一文を紙に書きのこした。

この文章が寫しとつたものの一即ち、事件の

経過

時代の一般的信仰を、あきかぬす、ためめ

ものである。

入口  
日美人は寢室に押し入らんとした。

ごとき、わがわがの形跡すら認められおりし

と雖も、故人かゝるのおまじには、常に閉じいた

りし <sup>ケースメント</sup>窓の扉は、開け放たれてあり。 <sup>約一</sup>ハ

イント「<sup>三合</sup>強」入りの銀器には、少量の <sup>エール</sup>強夾酒

を <sup>免酌</sup>酌としてありしが、今宵はそを飲み干しお

らざりき。この <sup>飲</sup>飲料はバリエイより来ぬ <sup>疑</sup>疑

師ホジキン <sup>ス</sup>氏といえる人により、検査せられ

たり。されど氏は、後にも検辰官の査問へ對

して <sup>誓</sup>誓せると同じく、その中に毒くら有毒

なる物質を突見し得 <sup>述べ</sup>おとす <sup>疑</sup>疑ぬ。辰 <sup>骨</sup>骨のいた

その程度又ある。惨状は、

く腫れあがりたると里がみたることには、当

然近隣の人々も、毒薬にやと誇り合えりて

あり。ベッドに横ありし屍體は、甚だしく取

りしおりに、わが徳たのみ友にして 保認者 悪業を

人か、いかに苦痛苦惱裏に死せ、かき、

如 擬定に推測し餘りありとおはゆ。ちよここ

い不可解 なまじ事 且つ余自身に とりて 是れは、

るの兇猛なる殺人の加害者 が行い たよ、或

る チムン 巧妓たる手段書の論 振とも 悪者

事あり。そは、辰野の 一 洗淨と埋花とを





彼女等は、その職事ごとのまま実地へ、いき

叫びて過したりと~~いふ~~の事

たりき。しかも彼女等の皮膚りは、なんらの

異状も認められざりしなり。——彼女等の証

を聞かや、余は、まかた館せし醫者師を招き。

ぬ。水晶の~~鏡~~<sup>レンズ</sup>擴大鏡の力を借り、充分は

きつて彼女等の肉體の、その部分の皮膚を

検査<sup>診</sup>したりも、二<sup>つ</sup>の小さき刺傷のほかに、

なんら重要なる事象を發見するを得ざりき。

われ等は、~~その~~かのホルギア法玉の指



友<sup>マニユク</sup> 聖書 卿が、この書の尊きを思い、時間に

寸毫の狂いなく、夜々の就床、朝々の起床に

際し、定<sup>め</sup>書たる却分を讀みあせしもの

をりき。而し余はこの聖書を<sup>ま</sup>読みあせしもの

りあげたり。この聖書たる、このいたましき

前兆を~~精~~討究し今やその真の本源を熟考す

べきの資料たるべきものなり。余思えらく、

かかる<sup>る</sup>施すに術なき時には、<sup>前途に光明を</sup>

認めべき、その實にあおかあたる肉光を、捕

えんとし<sup>る</sup>勝ちのものなり、<sup>在りて</sup>よし、

古くより多く行われたる迷信的方法をから、

ソールティーズ  
ト点 <sup>ソールティーズ</sup> [ *Les Sortes Biblicae* sur le *Deutero* ]  
「*Deutero*」は「*Deuteronomium*」の略である。」と云ふ

さんにはと。こは神聖多美寺の殉教王チャー

ルス及びスオー克蘭ド卿の行いたる実例

ありて、今日語り傳へらるるところなり。余

はこの試みの余れさしたる助力を興へざり

しことを告自せざるべからず。されどこれ等

恐るべき事件の根柢が、特来闡明せられん

べため、余はト点の結果を記し、この結

果が、<sup>解</sup>余の釋よりし更

ハ明快なる辭句もて、この大禍の真相が摘發

せらるる場合に當せんとする。——するもあち余

は、聖書を開き、或る諺句の上れ指を置き、

三四のト点を讀みたり。得たる諺句は

「これを伐り倒せ」(ルカ 11:17) 第十三章

「第七節」(ヨハ 1:12) 第二に得たる諺句は

「に位むもの永く絶え」(イザヤ書、第十三章

「第二十二節」(ヨハ 1:12) 第三に得たる諺句は曰く、

「の子の手もまた血を吸ふ」(ヨハ 1:12) 第三十九章

「第三十節」(ヨハ 1:12) —



再読する  
 フェル卿が四組馬車の陰謀の犠牲たつたといふこと

以上がクローム氏の著書手記から引用した

要旨である。マシユウ・フェル卿は、正式に棺

へ収められ埋葬された。葬儀の設け方は、つぎ

の日曜日、ローマ市内において講演された。是

は、探知し得ざる道義進路、すなわちイギ

リスの危機及基督の思行」といふの

たつた。著者はクローム氏の意見でもあり、

同時にその周囲の人々の憂鬱を憂鬱と見做し一般

的に憂鬱をうつた意見でもあつた。

マシユウ  
 フェル卿の令息、マシユウ  
 フェル卿二世は、著者



位と家督を継いだ。  
*えんまふうけと*  
キヤスリンカム

悲劇の第一幕は終わったわけである。  
*ハロネット*  
へつひ驚

くは *もあたら* 縁起をたぐったが、この新徒男爵は、

父が死んだ部屋は用いなくなった。ま、ほん

とくれ、彼が在世の間は、時々来客にあてか

うことはあつても、誰もその部屋で寝るこ

とはあつた。彼は一七三五年に死んだ。そ

うと筆着後、彼の家督がふしぎにも絶えず

絶死し、しめしそれが時のたつにたつて、  
*すこしきつ*

を増す傾向を示したところからは、金銀と



った。それ以後、この整兵は、野鳥が獺野に

にかきられた。驚きおかし、あんなに〜も整兵

死の徴候については、はつきりした報告もな

く、徹夜の見張りも、充分な手がかりがない

ので、筆者はサツフォークの農夫達が「キャ

スリンが「病」と叫んでゐるものを、それ以

上長々と語りくことはやめよう。

さきん言つたように、<sup>マシユウ</sup> 野二世は一七

三五年に死んだが、当然その令息のリチャー

ド卿が跡目を継いだ。教区の教令堂の北側

彼の考え方は

に、大きな家族席を造ったのは、この人の時

代だった。いかに大きなもので、  
教習室の

系譜を測り、  
彼の思惑は明らか

には、教習室の不浄な地  
地蔵の

にあり、この墓の中には、あ

のマザンソール夫人の墓があった。その場所

は正確に定められていた。これはクローム氏が

作成した教習室と墓地の計設のノートのおかげ

である。

有名人を祀る

墓法席を設けるため、  
墓を祀る

(2)

と淫つ膚一ツ

心も憂ひ、有名な魔女の墓をたどつた時、

村では、おぢりな興味の的となつた。その時

まじく多数の人達はマザール夫人のふとを

記憶しつたのだつた。まじくしめしめ

外の念と不安が強められたのは、おぢりな

みると、夫人の棺はまじくまじくほろどつた

まじくで破壊しつたが、中の骨

もまじくあつたを失せつたことだつた。

空に不思議な現象である。夫人が埋葬された

時、墓を掘り戻すべからずよきものは、一ツ



もよかつた。 ~~オオ~~ ~~オオ~~ ~~オオ~~ 解き室用い供する。以

外には、辰神と云ふといふ合理的な動機を想

像するとはできなかつた。

この出来事 ~~で~~ <sup>魔鬼女裁判の証や、</sup> 魔鬼女裁判 四十年前と地下に

眠つていた ~~魔鬼女~~ <sup>業績</sup> 裁判の証や ~~の証や~~

<sup>再び</sup> 義しはらぐ流行した。リチャード卿は棺を

焼き拂えと命じた。 <sup>多くの人々</sup> ~~は~~ ~~は~~ ~~は~~

~~命を~~ ~~命を~~ ~~命を~~ 命今通りやつての

けちめ、ずいぶん向く見ずたと考へた。

リチャード卿が悪徳者の草●新家だつたこ



とは事實である。卿の時代以前、ホールは牙

えがえした赤煉瓦の、美しい一層だった。た

が卿は、イタリアに旅行して、イタリア趣味

にかぶれまゝだった。そして、先人よりも金

銭の貯えが多かったので、イギリス式の建物

を見ようと、~~イギリス~~ <sup>イタリア</sup> イタリア宮廷式の建物を鑑

賞(賞)と決心したのだ。だから化粧浴槽 <sup>スタッコ</sup>

や表装石 <sup>アシユラア</sup> ~~煉瓦~~ <sup>をかふせ</sup> 煉瓦 ~~を~~ <sup>おもしろ</sup> ました。

くもない西羅馬式の大理石も、玄関や花壇に振

えん。ティグオリの <sup>シビル</sup> 巫女寺の模造 ~~を~~、沼の



おめにか

「狩獵をしようという」

寢室に立ちこめた。でも、ひどく寒いので、

火を絶やす事とはできなかつた。

また

のあたり

窓がカタカタ鳴って、誰だつてちつとも落つ

た。おれはそれはいのだった。しかもその日

つうちに、身分のある客の數人、この館へや

つて来そうに思われた。多分押寄りさうそ

御目がおとされた多分(これは狩獵の向中つ

焦燥)

おつたか)は、時間のたつたつれ、いよいよ

はげしくなつて、卿は、<sup>ゲーム・ポリガウア</sup>獵獸保サ護者「獵獸

と月と狩獵規則を嚴重に適用する地主。」としての自分の名聲を傷

遺作

けはくまいのと、心配したくらいだった。し

かし、~~御~~御実情にやまきしていつた 近因は、

と晩中眠らなかつたといふ、他の事実による

ものだった。御は、たしかに、二度ともしそ

の部屋で眠る気にはなれなかつた。

以上の朝食の時、御がむろり考へ込んで

いる <sup>おも</sup>主な事蹟だった。そこで御は、食事をす

ましたあと、どうすれば一番自分の意見に合

うか、~~御~~御実情と順序よく調へ はじめた。す

いぶん長くかかつて、一つの事を殺見した。そ

これは、東の眺めと北の眺めをもつてゐる。窓  
 だつた。<sup>しめ</sup>この部屋のプロアは、<sup>しめ</sup>下僕達がが女が通

りすぎるところで、御はそんなところへベッド  
 を置くのはよくないと思つた。いや、せむ

西向きの窓がある部屋にかゝる。そうすれば

太陽の光がさしこんで、<sup>早くから</sup>御目おませるよう

なことはない。しかもその部屋は、家事の通

~~路~~<sup>路</sup>にあたりぬところへ置く。——ここ御のい

うと、家政婦は善悪思案に回つたよゝたつ

た。

リチャード  
「お嬢さま。」と、彼女は言った。『と  
いんてん』

のお屋敷で、そろそろお部屋は一つづつござ  
いませんけれど。』

『どの部屋だ？』と、リチャード御は訊  
いた。

『それはあの、おむめしの大旦那さま、マ  
シユウさまので——西の寢室でございす。』

『よし、おそろししよう。今夜おらそこ

で  
寢よう。どう行くのだ？』と、こう行け

ばいいんだな。』御は急いで出ていった。



「ああ、リチャードさま。でも、あつすこ

ひはこの四十年間、誰一人寝ないの**たことは**でござい

ます。空気がつて、マシユー大旦那さまがあ

すくでおなごをりいなるつて以来、まるで入れ

ぬいたことはないのでございませう。」

こう言ひながら、家政婦は、バタ、バタとい

て行つた。

「さあ、ドアを開けなさい。チドック「家政婦の名」」

といひかくるこの寝やまを見よう。」

で、ドアは開かれた。たゞい、自らのつま

るようす、土臭いにおいがかした。リチャード

卿は、窓のほうへあるいて行つたが、たまた

ちとすうり、習慣通り遠くをうろろに跳ね、

チェスボードを突きあげた。館のこの一端は、ほ

とんど模様替えのきつていない場所だった。

巨大な、ゆがみの樹が、生い茂つていたので、

とわくに跳びは遠くへいた。

一日中、通し、  
何となく、チドック、びく、あまは午後

わしの寝室をこころい移す。わしの

この部屋は、キルモアの主教さん

お入帳するのいい。と

曰ごめんください。と、その時、~~の~~<sup>へっ</sup>の音が

二人の言葉に割り込んだ。ヨリチャード卿、

ちよつとお目にかかりたいと存じますが。

ヨリチャード

ヨリチャード卿は振り返った。ドアの入口で、

頭を下げてる、黒おくめの人物が目につい

た。

曰~~後~~突然押しかけて参上いたしました、

失礼ごめんください。あなたは、たぶん私を

こそんどありませぬ。私は井リアム・クローム

と申す者でございませう。私の祖父はあやうの  
御祖父<sup>か</sup>又御在せの頃、<sup>の土地で</sup>物師<sup>の</sup>をいたしとありまし  
た。

曰ああ、よく承知しとおりませう。クローム

さんというお名前前は、いつまでもこのキャス

リンガムでは、通り名でせよ。名考まはニせ

代續いた友誼を新たにすることは、よろこば

しいです。<sup>唯今</sup>縁者<sup>を</sup>園多<sup>を</sup>時園多<sup>を</sup>友にか<sup>わたし</sup>に御用で

も？ お見うけするところ、お急がらうしい

御様子  
を尋ねたか。

「まったくお言葉の通りです。私はノール

ツチからバリー・セント・エドマンツまで、でき

るだけ急ぎな書かして参ったのでよ。私はあな

たにお手厚しすため、お返ぬしんあけでき。

これは私の祖父の死に際して遺しておきまし

たもので、あなたに立寄つて頂いて、第一階

に吟味して頂きたいのでございませう。この書

類は、あなたが親身な御興味をもちられ

ようなことを、あるようになせられませう。」

黒字一文字リタ

「御懇切なことで、クローラさん、まあ、

暮向までおいでください。一杯さしあげよう。

ら、待一緒にその書類を拝見したい。——で、

チドック、お前は今も言ったようれ、この宿

室に同を入れてくね。——うむ、ここはお社い

父さんの墓をなくされたところだ。——う

む。どうもその樹の部屋を、こめつほくす

ようだね。——いや、もうわたしは、ちんも同

きたくくすい。面倒なことはさうもないであ

くれ。あしの言いつけ通りやればいいんだ。

——さあ、クロールさん、おいでください。



別行一宇リダ

二人は書齋へ行つた。若いクローム氏の持居同兼書齋

来りて包みークローム氏は去りてケンブリッ

ジのクレア・ホールの研究傳友になつていて、  
ついで

ホリエナスの名著を公報した人だからには、

視又 クローム牧師が、マシユウ・フェル卿の死

の日作製した手記その他がはいつていた。

まずリチャード卿は、あの書き置き謎のよ

うな聖書ト占に向き合つた。これ聖書を御

はいかにも面白かつた。

曰ふふむ。と、彼は言つた。曰視文の聖書

別行一宇リダ

は、淫慮のある思惑を興えられたわけですか。――

「これを伐り倒せ」か。もしも、これがあ

のとおり、この掛を指して言ったものだとすれば、

祀又は、わたしは、  
あの樹を、うちきりては置  
き、その会堂を建てる

おまゝいふことを確言したわけですか。あんな、加カ

タシ  
答見や瘡の出来なつていふような掛は、見

たことありません。  
のたね

居向れば、この一家の春が飾つてあつたが、  
書物

リチャード卿がイタリア 全集 でのサ鬼集

受び、自ら中身のと、それを入れた適当な

室を博覧中なので、書物の藪は多くはあつた。

リチャード卿は、手記から書翰巻簡見あげ

書加本も

た。きつた。

曰その老練言者

トをに使つた  
聖書を指すは、まゝあの

中に<sup>おいで</sup>美だろか？ 一つお目にかかりたい

ものだ。

部屋を横切つて、卿は、一冊のどつしりし

た聖書を取り出した。美たしめいその

取

フライリフ

書だつた。

飛び頁

本の前後に  
ある白紙

には、こゝろした



らがるべし"か。 なるほど！ ありやうの御社

父はいい豫言されたじやないですか。 え？、こ

れでしよう、わたしには豫言者無用です。 見解

が同じです。 いや、クロームさん。 わたしは

ありやうの持つてまわらん包みね、衷心お礼を

申します。 ありやうはよほどお急ぎでしょうな。

まあ、<sup>どうぞ</sup> ~~お礼を~~ <sup>くださ</sup> しろ一杯お重ぬい。 山

こんなぐあいに、しん底から款待の意を表

して（それはリチャード卿が、この青年の託

し振リや舞 <sup>態度</sup> <sup>（ん、感謝を）</sup> としていたので、

二人は別れた。

午後のなつて、客おまへ。キルモアの主教、

リイ・ハーグイ夫人、#リアム・ケントフイー

ルド卿等であつた。五時に<sup>ダイナー</sup>正飯、それから

酒、トランプ、<sup>サッパ</sup>晩食、そしておのおの寢室に

退散した。

翌朝、リチャード卿は、気分がすすまな

といふので、みまと狩猟には出かけなつた。

卿は、キルモアの主教と<sup>閑談</sup>した。この主教

は、當時のアイルランドの主教<sup>連</sup>とはなつた、



第一字リク

その教とを<sup>世間し</sup>、そして宮内とこれか有りな  
時日<sup>駐在</sup>にするのだつた。

主  
リチャード卿は、其地を<sup>ラス</sup>

あるききながら、この館の<sup>ヤウ</sup>様替えや改め

ついで、いろいろ語り合つていたが、主教は、

西の都屋の忠を指さして言った。

リチャード卿、あなは、あの都屋へは、

わたしの<sup>又持つ</sup>アイルランドの教徒<sup>と</sup>を、一人だつて泊め

ることはできませんよ。

それはどういふわけですか？ ああ、都屋は、



のは、と心算のちうところ、あなは夜つ休  
息~~後~~がよくとれてゐる。ようりは見えませ  
んわいさ。

口まつたく、その~~後~~<sup>ため</sup>かほのわけかあか  
りませんが、あたしは夜十二時から朝四時ま  
でしか眠れないので~~ます~~す。だが、あの樹は  
明日切り倒しましよ。そろすればあなは、  
あの樹のことで、もうなにも聞かなくてすむ  
わけだよ。

口その情決心には大賛成です。あの樹はあ

んま  
に春葉がお生いふさがつていゝため、内

氣の呼吸が困難で、どうも衛生的ではないよ

うでま。

「御有る通りだと思ひます。たか眼は窓

を開けなかつたのです。あの窓はなうたかガ

クガタ鳴りつけたので——きつと枝が窓を舞は

たいたのでしよいか——それで、目はさめ通し

た。

何そんなことはあり得ないと思ひます

な。  
~~あり得ない~~ ここ——ここから

リカリクカクカクした

どらんまさい。一番ちのい枝だつて、大風が

吹いたのでまかつた、窓扉にさあられま

せんよ。しかも昨夜はまうで風はまのつたで

よ。枝は一本は折れても、ガラスにはあたり

ませんよ。」

「まいったく ~~ま~~ ですよ。では、~~ま~~ <sup>あんなに</sup> 音はなえた

つたのでしよう。——ええ、しかも、窓扉は

埃が一杯かかつて、いれや傷痕がついていた

のですが。」

~~ま~~ <sup>と</sup> ~~ま~~ <sup>と</sup>、白鼠が ~~ま~~ <sup>き</sup> 常春藤 ~~を~~ <sup>を</sup> 傷つて

御~~様~~ おやすみの  
挨拶を~~して~~

別行一筆リテ

はいのぼつた<sup>の</sup>にちぬいないと。——それは主教  
の意見だった。リチャード卿はその意見に承  
べつた。

で、その日暮はきれごともなく、夜になつ  
た。未客連中はそれぞれ部屋へ引こ<sup>つ</sup>た。

リチャード卿も、今、寝室——あの、祀文  
マシユウ卿が使つた寝室にはいつた。燈火を<sup>あけ</sup>

消してベッドに横あつた。この部屋はちよ<sup>う</sup>

ど厨の上にあつていた。<sup>そこは</sup>静かな暖かな夜だつ

たので、窓は閉けはな<sup>ま</sup>しにして置いた。



廻行一字リタ

——どこからとなく、ごくちいさを先が、

ベッドのあたりに現われた。だが、そこには

また

一フの●大怪な運動（ま）があった。それは、リチャ

ード卿が、音とていば書いえず、實れおす

の書きをたてて、~~書~~頭を急れあちこち動か

してゐるもののように●思われた。

ま、~~書~~

~~書~~ものまがらおしい落暗かりたので、

御はま

幾つかの

うい文鳥色の頭を~~書~~持ち、それが胸く

らいの低きで前後に動いてゐるよりのも思わ

れた。それはおそろしい幻影だった。いや幻

仔猫のよき~~き~~に

景以上のなれものでもよいのか？

いやはや

~~そ~~こに！ ところで、~~な~~なれか、やあふかを

ドタリという音もろとも、ベッドのそとへ

落ち、キラツと肉め襲いて窓の下失せ去つ

たものがある。つおいて、ほめ<sup>め</sup>の四<sup>も</sup>—そ

して、そのあとには再びひっそりとなつた。

一行アケ

“なんじ朝あさにわれを求め人も、われあらざ

るべし”

一行アケ

マシユウ卿のようね、リチャード卿と——べ

ツトの中で、黒おんで死んでいた！

この知りせぬ、客や下僕しもべたちは、まづ青い

なつて無言のまま、空の下に集つた。ローマ

法王の密使とさきたといふイタリアの毒殺者等は、

その方法として空気の毒を撒いたのだつた

か——ここに集つた人達も、こゝろした想像を

敵えてした。キルモアのま者は、とぬり、その

樹を見あげた。すると、低い枝の股に、一匹

の白い牡猫が、くすくすまうて、左が年の向い（毒）腐

トラ・キヤット

腐の齧 蝕してできた空洞を見おろして

た。猫は、その中にあるまじか、ひとく心

をひかれて見つけようとした。

突然猫は、空洞のふちへ這いのほり、中へ

頭を伸ばした。その途端ふちが崩れ

た。猫は空洞の中へ滑り落ちた。みんなは、

その落ちる音で、樹を見あげた。

誰だつて、猫が叫びを發することはない

てつる。だが今、このと、ゆかりの太樹の

幹から出たように、こゝろを猫の叫びを聞いた

あまのまゝのまゝとせよと  
あまのまゝ

人はあゝまい。二度か三度——目撃者達は  
はつきりはおぼえていたわつたわ——その叫  
びが聞えん。霧つおいてなにか騒ぎと争ひ  
の音が、かすかに、激い色まれたように響き  
たかと思つと、バツタリ絶えてしまつた。だ  
が、メリイ・ハーグ・エイ夫人はまったく氣絶  
した。家政婦のチドックは両肩を押へて逃げ  
出し、<sup>テラス</sup>其土地でとろんだ。

キルモアの主教と、井リアム・ケントフィー  
ルド卿は、そとへ残つた。しかし二人とも、






「こいつで底を摺ってみなくつややなり

ません。生念うつつかけですよ、且どわい那極まなり〜ろあ


の恐ろしい死の秘密は、善の底にある

と思われまじやう、

園丁は、カンテラをもち、まじり様子

をのぼった。そして用心〜空洞うつつにそれ

をかろした。見あげてくる人達は、園丁の空

洞へ首をのめ、カンテラの黄

色の光が、彼の顔を照らした。その光の

たちまち、その顔は、信じたことゝひまを





から。

果してその通りだった。まさか、木の股に、

痛で蕪ちれたまるい固體アツク——人間の頭ほどの

大きさの——が、忽ちと——とあがわれ

潰れて落ち、よくに思われた。こんなことが

五と回くつわいて同じよまなるまるいものが空

中と病人で草の上に落ちた。ままそのまま動か

なくなつた。主治は無理に近おついて、それ

を見た。——筋ほい、息げた、大きな蚊株

の殘骸死にほめたるかった！

そして火が低く燃えまがるにしろおい、

~~つと~~ ~~燃えまがる~~ ~~死骸~~ ~~の~~ ~~幹~~ ~~から~~ ~~爆~~ ~~ぜ~~ えん

出しはじめた。 ~~燃えまがる~~ これ等は、みず灰色の

毛で蒸かされているようにみえた。

その日中、 ~~燃えまがる~~ とねりこの樹は燃えた。 ~~燃えまがる~~

~~燃えまがる~~ <sup>か</sup> きれぎれに倒れるまで、人々はその

ぐらりにまっつてみた。そしてしきりに ~~燃えまがる~~ 出

してまわすやつを殺した。 ~~燃えまがる~~ <sup>すつめり</sup> ちりも残ち

れなくするものは、 ~~燃えまがる~~ ちりを時間的過きた。み

んをば用心ぶめく ~~燃えまがる~~ 四方から逆のあいて、

樹の根を調べた。

曰あれあれは、樹の根が下れ、地中にまゐる。

い穴がある。うを登り見した。と、後いキルモア

のま教は言つた。曰その中は、あきふぬ

煙で空息したところ、動物の残骸の、二つ

三つあつた。そのともつと奇妙なことは、

このは葉の一方の壁に、木乃伊とも骸骨ともい

つていいものが、くずくまうていた。皮膚層は

ひからびて骨にくっつき、すこしばかり黒い髪

毛が残っていた。——この髪は毛で調べた



ところによると、それは女の屍體に疑いなし  
といふことが認定された。しかも、たしかに、  
五十年間くらゐ埋めていたといふことも！」